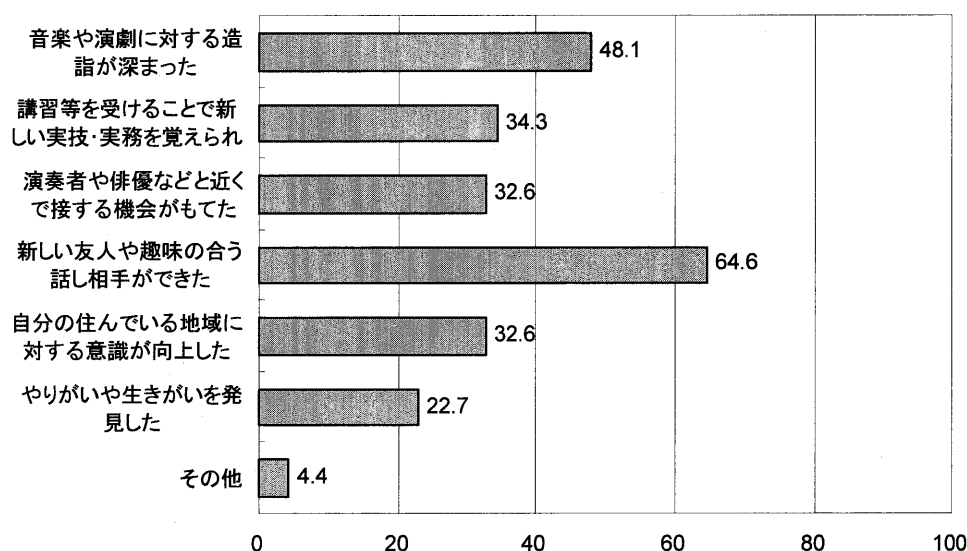


## I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

ったら、出会っていない人、やっていないことは仕事の何十倍もある」あるいは「“やればできる”と思えるようになったし、ネットワークの重要さも学んだ。自分個人では全く不可能なことが、その組織では可能になるのは素晴らしい」などの意見が聞かれた。

■ 図表 1-17 ボランティア活動をして良かったと感じている点(〇は3つまで)



同じように、「音楽や演劇に対する造詣が深まった」点を評価している人も48.1%いる。「プラネット・ステーション」のように、音楽・演劇以外の分野の活動も行っているケースでは、「芝居がしたいと思って来たが、美術や音楽など他の分野に関する知識も得るようになり、興味をもつ範囲が広がって面白くなった」という感想も聞かれた。

また、ウラ方系のボランティアをしているところでは、「実技・実務を覚えられた」点が評価されており、全体で34.3%という数字が出ている。ウラ方に特化している「舞台研究会(喜多方プラザ文化センター)」では62.5%、「ステージオペレータークラブ(たんば田園交響ホール)」では51.4%が、技術的向上を良かった点にあげている。

### (3) ボランティア運営における課題

最後に、ボランティアの運営における問題点や課題を整理してみたい。

#### ① 劇場・ホール側からみた問題点・課題

##### ● ボランティアの位置づけとメンバーの意識

- ・ボランティア参加者の“意識”が必ずしも統一されていない面があり、プロフェッショナルとアマチュアの間領域に位置している。ウラ方業務のように危険

を伴うものや報酬を得ているものについては、特にプロ意識が要求される。「プロなのかアマチュアなのか、見る側と本人とで意識にずれがあり、トラブルになることがある」と指摘する担当者もいる。

- また有職者や学生が多く仕事を終えた平日の夕方などに活動しているボランティアの現場では、「時間に遅れる、連絡なしに来ないなどのために、予定していた作業が進まない」という意見も聞かれた。

#### ● メンバーの固定化

- 新人の加入が少なく、メンバーが固定化する傾向が指摘されている事例もある。10年以上も活動している「喜多方プラザ文化センター」では、「あまりに第一世代のホールに対する思い入れが強いせいか、後に入ってくる新人にその想いを伝えられないでいる」という。
- また、メンバーに登録はしているものの、実際に頻繁に活動するメンバーは、時間的な問題や技術の格差から限定された少数になってしまう例もあった。
- メンバーの年齢層がある部分に集中している組織では、ボランティアの継続的な活動のためにも、「世代交代」への対応策を検討しておくべきではないだろうか。

#### ② ボランティア参加者から見た問題点・課題

ボランティア参加者の側から見た問題点については、以下のような点があげられている。

#### ● 研修や講習の充実

- アンケート調査結果では、「研修や講習をもっと受けたい」が27.6%で最も多い。これについては、現状で十分な研修が行われていないという見方と、経験を重ねるにつれてボランティアの要求が高度化・専門化している向上心の表われであるという見方ができよう。
- 「喜多方プラザ文化センター」では、前述のとおり「技術面の向上を満足している点にあげた割合が62.5%と最も高かったものの、「研修や講習をもっと受けたい」を問題点にあげている割合も33.3%と高い数字になっており、後者の例といえる。
- 事例別での研修や講習への要望は、ボランティア制度を導入して2年目の「春日市ふれあい文化センター」が71.4%で最も高く、今後の活動の広がりが期待される場所である。

#### ● 業務量の適切配分

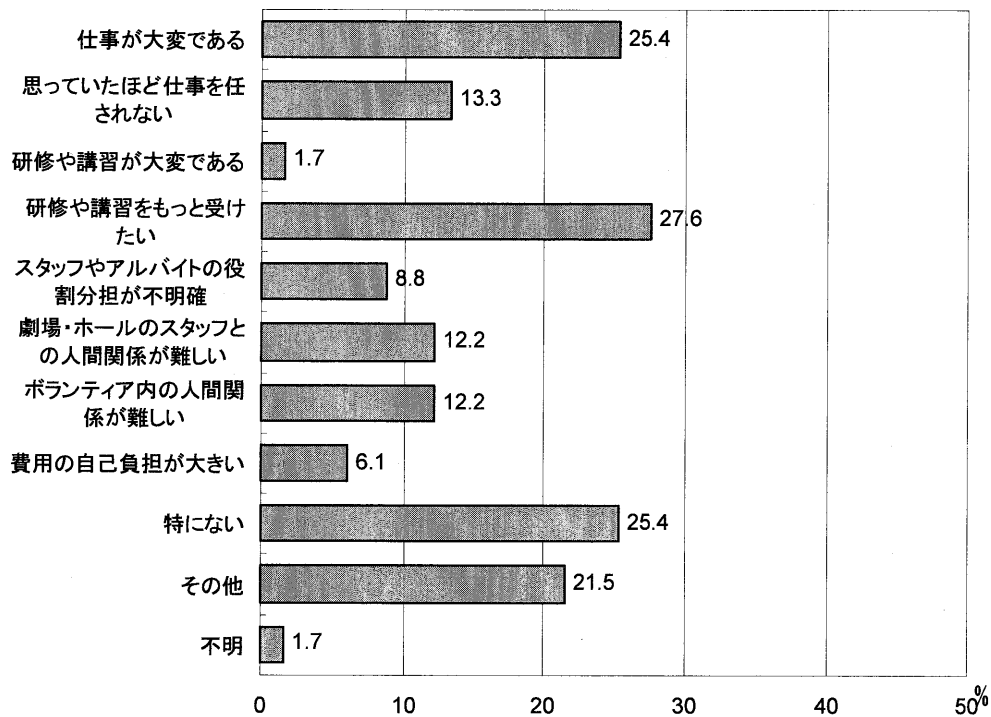
- 「仕事が大変である」と答えた人も25.4%おり、短期間に業務が集中する「武生国際音楽祭推進会議」では54.8%がそのように答えている。逆に「春日市ふれあい文化センター」では、57.1%が「思ったより仕事を任されない」と回答

## 1. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

しており、予想や期待と現実のギャップが現われている。

- ・「いまだて芸術館」の企画プロデューサーの意見では、国内外のアーティストへの対応や事業の事後処理、個別の作家の要求への対応など、「活動の規模が大きくなればなるほど問題も拡大する」点を指摘するものもあった。業務範囲の拡大にともない責任の範囲が広がることによって、ボランティア内部で対応すべき問題点も増大するというであろう。

■ 図表 1-18 ボランティア活動で抱えている問題点、期待と違った点(〇は3つまで)



### ● 活動時間の確保

- ・ボランティア活動をしたい気持ちがあっても登録をしているものの、その時間を確保するのに苦慮している声も多く聞かれた。
- ・具体的には、有職者が 3/4 を占めるという劇場・ホール系ボランティアの特性からもわかるとおり、「時間的にボランティア活動のための余裕がない」、「自由業なので仕事の時間を削ってボランティアをしている」、「土日にボランティア活動をすると休みがなくなってしまう」などという内容である。中には、「活動時間が夜間になったり長くなったりするため、家族の理解が必要」、「子育て中で、夕方の外出が難しくなった」という意見もあった。

このような状況のなかで、「特にない」という回答が25.4%あり、全体の1/4は現状にほぼ満足しているという見方ができる。

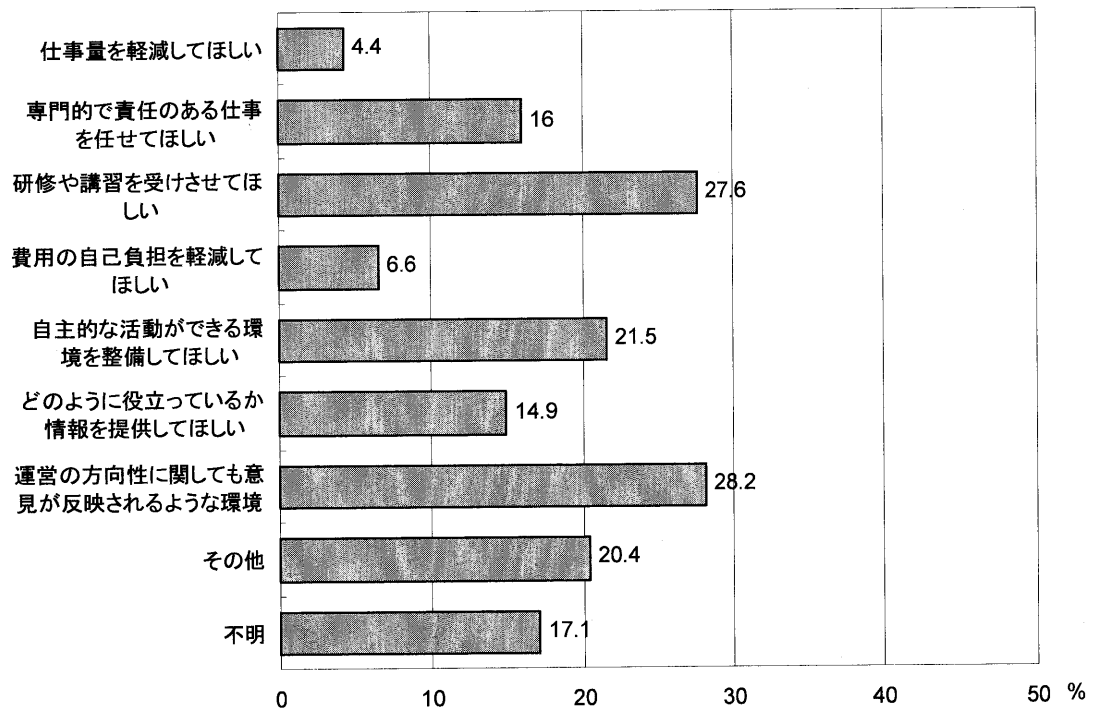
### ③ 活動に対するボランティア参加者の要望

前項の「ボランティア活動における問題点」をもとに「現在のボランティア活動に対する要望」を聞いた結果が図表 I -19である。

#### ● ボランティアの位置づけの明確化

- ・「運営の方向性に関しても意見が反映されるような環境を整備してほしい」が28.2%、次いで「研修や講習を受けさせてほしい」が27.8%、「自主的な活動ができる環境を整備してほしい」が21.5%と、いずれもより積極的な関わりを求めている状況がうかがえる。
- ・このように、劇場・ホール側がボランティア制度導入の際に、「ボランティアは成長する」ことを視野に入れておくべきであり、またその向上心を積極的に活用できる体制を整備することが重要であろう。
- ・また、ボランティア側の要求が次第に高まっていくなかで、劇場・ホールそのものの運営の方向性が明確にボランティアに伝わっていると同時に、その中で自分たちの位置づけが明確に認識されていることも重要である。

■ 図表1-19 ボランティア活動への要望



#### ● 研修の充実、技術格差の是正

- ・研修の充実については、特に技術面の向上に対する要望が強く求められている。高度化する主催者の要求に対し、現状の技術では対応しきれないものもあり、より一層技術的な対応力を高めたいという要望がある。職業として毎日あるいは定期的に当該業務に携わることができないため、「しばらく来な

## I. 公共ホール・劇場におけるボランティアの導入状況と実態

いと、「カン」がなかなか取り戻せない」という声も聞かれた。

- また、活動を始める時点での経験やその後の活動頻度によっても、ボランティア内部で技術格差が生まれ、実際の現場に対応できる層が限られているといった点も指摘されていた。
- 技術面の研修は、現場で先輩のオペレーターから教えてもらって習うという部分も少なくないが、「新しい人をさそっても、なかなか徒弟制度的な体制にはついて来れず、長く続かないのが現状。世代間のギャップもあるかもしれない」という声も聞かれている。
- 個人レベルでの技術研鑽を積むことで、ボランティア全体としての対応力を高める努力が望まれるところである。

### ○ 業務量と費用負担

- ボランティア活動が期待と違っている点について「仕事が大変である」をあげた割合は25.4%であったにも関わらず、「仕事量を軽減してほしい」との回答は4.4%にすぎない。逆に「専門的で責任のある仕事を任せて欲しい」が16.0%もある。
- 一方、費用負担については「費用の負担が大きい」との回答が全体で6.1%（「武生国際音楽祭推進会議」で16.1%、「プラネットステーション」では25.0%）あり、「費用の自己負担を軽減してほしい」と回答しているのは6.6%（「武生国際音楽祭推進会議」で9.7%、「プラネットステーション」では25.0%）である。
- ボランティア活動を始めた当初は、前向きなエネルギーのために多少の業務量や経費も負担に感じないが、何らかのマイナス要因によってそのエネルギーが摩耗してきた時に、費用負担が二次的な要因になってボランティア活動そのものを継続する意志が薄らぐことも考えられる。業務の量については、少々大変なほうが「思っていたほど仕事を任されない」よりもやりがいを感じられるが、現実的な費用負担については限度がある、というのが現状のようである。